

文法史と文法史研究

—「古典文法」の背後にある面白さ—

小 柳 智 一

キーワード：助詞 もが ばかり のみ 文法変化

はじめに

日本語文法の歴史を扱う「文法史研究」は、近世から本格的に始まり、現代に至るまで研究の蓄積も多い。特に古代語文法の研究成果は、高等学校国語科の古典文法教育の土台になっているので、非常に多くの人がそうと知らずに文法史研究に触れていることになる。そして、古文の授業を受けた人の多くはこう思っただろう——古典文法はつまらない、と。

古典文法教育における「古典文法」は内容が固定しており、新しい研究成果を取り入れて更新することはまずない。また、便宜的な整理を多く含み、便宜は実相を隠しているが、それに気づかれることもまずない。気づかずにそういうものとして丸暗記することが、教育の近道ようでさえある。生徒の知的好奇心が活性化しないのもやむをえないと思う。

しかし、「古典文法」の土台となる古代語文法は、つまらないものだろうか。私は高校生の時に「古典文法」が面白いと思ったからこの領域に進んだのだが、今思えば、高校生の私が興味を持ったのは「古典文法」の埒外のことだった。本稿では、主に助詞を例に取り上げ、「古典文法」の埒から出て、文法史の観点から考えてみる。私自身の体験も含めながら、私の思う、文法史そのものの面白さと、それを研究することの面白さを述べたい。「古典文法」の背後にある面白さが伝われば幸いに思う^{註1}。

第1節 文法史研究の2つのタイプ

最初に、文法史研究の2つのタイプについて説明する。が、その前に、日本語史に関する基本的なことを簡単におさらいしよう。残っている資料の状況から、日本語史のわかる範囲は時間的・空間的に限られている。時間的にはだいたい8世紀から現在までの1300年くらい、空間的には現代の奈良・京都を中心とする関西圏で、17世紀以降になると東京（かつての江戸）を中心とする関東圏が加わるが、その他の地域は断片的にしかわからない。連続する時間を大まかに分割したものを「時代区分」と言い、表1が一般的である（小柳（2018：

注1 話がやや逸れるが、昨今、高等学校だけでなく大学の教育においても「古典が何の役に立つのか」と批判的（非難的）に問う向きがある。こう問う時、多くの場合「役に立つ」は「今すぐ役に立つ」という意味であり、問いの根底には、科学と技術を区別せず、かつ技術だけに価値があるという思考（嗜好）があるように見受けられる。しかし、科学と技術は目的が異なり、技術は（今すぐ）役に立つのが目的だが、科学は世界の姿を探るのが目的である。科学の成果は将来的に技術に役立ち、社会のあり方に役立つものである。古典研究は科学（人文科学）に属する営為であり、上の問いは、問いの立て方を誤っていると思う。本稿で述べる面白さは、上の問いと無縁であることを予めお断りする。

15))^{注2}。6区分と3区分は、取り上げる話題に適した時間幅によって選び、本稿では、第2節と第4節では3区分を、第3節では6区分を用いる。

表1 日本語史の時代区分

政治史	6区分	3区分
奈良時代以前（-794年）	上代	古代
平安時代（794-1192年）	中古	
院政期（1086-1192年）	中世	中世
鎌倉時代（1192-1333年）		
室町時代（1333-1603年）		
江戸時代（1603-1868年）	近世	近代
明治時代（1868-1912年）	近代	
大正時代（1912-1926年）		
昭和前期（1926-1945年）		
昭和後期以降（1945年-）	現代	

3区分で言う近代語、特に6区分で言う近代・現代語は、東京方言を中心とする共通語を考えるのが一般的だが、中世以前で実態のわかる日本語は、前述のように、関西圏の方言である。したがって、古い時代の日本語（関西）と、現代日本語（関東）を比べるのは、地域が異なるので、無理があると思われるかもしれない。しかし、比べることによってそれぞれの特徴を明らかにする対照研究では支障にならず、古い時代の日本語を見る上では、むしろ、有効な方法だと言える。本稿でも対照して特徴を示す。

また、日本語史研究のための資料は、時代によって性質が異なり、古い時代ほど種類も量も限られる。特に上代の主要な資料は和歌なのだが、現代日本語を考える際に短歌、あるいはJ-POPの歌詞を主要な資料とすることはほとんどないから、古代語と現代語では、文体的にも大きな差がありそうである。しかし、本稿で取り上げる助詞のように基本的な機能語（文法的意味を表す形式）は、和歌と散文で極端に異なることはないと思われるので、慎重に考える必要はあるものの、過度に神経質になることもない。

さて、文法史研究には大きく2つのタイプがある。1つは「共時的研究」と言い、過去の特定の時代における言語を静態的に捉え（この言語像を「共時態」と呼ぶ）、文法現象を記述したり、その規則や体系を解明したりする研究である。例えば、(1)のような問題は共時的研究で扱われる。

(1) a. 中古の助動詞「む」はどのような意味を表したか？

b. 古代の係り結びはどのような機能を担っていたか？

もう1つは「通時的研究」と言い、言語を動態的に捉え（この言語像を「通時態」と呼ぶ）、時間の経過とともに変化する文法現象を記述したり、変化の要因や仕組みを解明した

注2 時代区分はそれ自体が研究テーマになる。例えば、『日本語学』37-13（2018、明治書院）の特集は「日本語史の時代区分」だった。なお、鎌倉時代の始まりは1185年とするのが現在一般的だが、私の学生時代は1192年だった。

りする研究である。例えば、(2)は通時的研究で取り組む問題である。

(2) a. 助動詞「たり」はどのように変って「た」になったか？

b. 係り結びはいつ、なぜ消失したのか？

ただし、共時態と通時態は、1つの言語の、捉え方の違いによる2つの像なので、無関係な別々の存在ではない。以前、次のように述べたことがある。

(3) 共時態の研究は言語を静態的に捉えるので、個々の形式の関係が観察しやすく、言語の体系を明らかにするのに適している。体系とは要素が孤立せず、他の要素と相互に関係し合っ^て全体が働くシステムのことである。一方、通時態の研究は言語を動態的に捉えるので、特定の形式の時間的な先後関係を観察しやすく、言語の変化を明らかにするのに適している。しかし、共時態と通時態はあくまでも仮設した像であり、共時態の言語や通時態の言語が別々に実在するわけではない。実際の言語は体系を有しながら時間の中で変化する、あるいは、変化しながら体系を創り続ける。そのため、共時態に見る言語体系は前代から多くを受け継ぎ、通時態に見る言語変化は強いて体系を破壊する方向へは進まないと考えられる。

〈小柳 (2018 : 22)〉

したがって、共時的研究でも通時態に対する目配りが必要であり、通時的研究でも共時態を捉え損なうとうまくいかない^{註3}。本稿では、第2節で共時的研究の考察、第3節で共時的研究と通時的研究を組み合わせた考察、第4節で通時的研究の考察を行う。

第2節 終助詞「もが」の問題

まず、古代語の終助詞「もが」を取り上げたい。終助詞は、文末に現れて発話者の心的意味を表す。一般に助詞が付く(助詞の前に来る)語の品詞と形態は一定の範囲で決ま^っていて、例えば、格助詞「を」は(4 a)のように名詞に付くのが原則である。(4 b)のように形容詞連用形に付くことはない。(4 c)は形容詞連体形に付いているが、「菊の花のおもしろき(=菊の花の見事なの)」が名詞句に相当するので、名詞に付くのと^同じである。

(4) a. 御前に菊を植ゑさせたまはむ。 〈平中物語・20段、p. 486〉

b. *おもしろくを植ゑむ。

c. [菊の花のおもしろき]を植ゑて御まうけをつかうまつれりけり。

〈大和物語・172段、p. 417〉

また、接続助詞「ば」は(5 a)のように未然形にも、(5 b)のように已然形にも付くが、意味が異なる。前者は仮定条件、後者は確定条件を表す。いずれにせよ、活用語の未然形または已然形という範囲で付くものが決ま^っている。

(5) a. 立ち別れ いなばの山の 峰に生ふる 松とし聞かば いま帰り来む

〈古今和歌集・巻8・365〉

b. わがために 来る秋にしも あらなくに 虫の音聞けば まづぞ悲しき

〈古今和歌集・巻4・186〉

終助詞も同じで、願望を表す「ばや」は(6 a)のように動詞未然形に付くと決ま^ってい

註3 野村(2019)は、このことをもっとラディカルに述べている。

る。(6b)のように終止形などには付かない。

(6)a. ほととぎすの声たづねに行かばや。 〈枕草子・95段、p.184〉

b. *たづねに行くばや。

このように、助詞の付き方は一定の範囲で決まっており、これは古代語でも近代語でも同じである。ところが「もが」は違う。「もが」について、2つの辞書を参照すると、次の下線部のようにある。(7a)は高校生の私が愛用した古語辞典。

(7)a. 体言・形容詞の連用形、助動詞「なり」の連用形などに付いて、文を言い切り、存在・状態に関して、心の中でこうあればいい、と願望し期待する気持ちを表すのに用いられる。…があつたらなあ。…であつたらなあ。

〈三省堂例解古語辞典 第2版〉

b. 文末において、体言・副詞・形容詞および助動詞「なり」の連用形、副助詞「さへ」などを受けて、願望を表わす。 〈日本国語大辞典 第2版〉

「もが」はいろいろな語に付きすぎるのである。(7)で掲げているものに付いた具体例を次に挙げる。

(8)a. …… 老いず死なずの 薬もが 君が八千代を 若えつつ見む
〈古今和歌集・巻19・1003：名詞（体言）〉

b. 天地と 共にもが〔登毛尔母我毛〕と 思ひつつ ありけむものを ……
〈万葉集・巻15・3691：副詞〉

c. いはばしる 滝なくもがな 桜花 手折りても来む 見ぬ人のため
〈古今和歌集・巻1・54：形容詞連用形〉

d. 心がへ するものにもが 片恋は 苦しきものと 人に知らせむ
〈古今和歌集・巻11・540：コピュラ（断定の助動詞）「なり」連用形〉

e. ありはてぬ 命待つ間の ほどばかり 憂きこと繁く 思はずもがな
〈古今和歌集・巻18・965：助動詞「ず」連用形〉

f. 春されば 散らまく惜しき 梅の花 しましは咲かず 含みてもがも〔含而毛欲得〕
〈万葉集・巻10・1871：接続助詞「て」〉

g. 佐保川の 川波立たず 静けくも 君にたぐひて 明日さへもがも〔兼欲得〕
〈万葉集・巻12・3010：副助詞「さへ」〉

私は高校の「古典文法」の教科書でこれを知り、「何だこりゃ」と思った。なぜこんなにバラバラなのか、何か統一的なルールはないのか。——実はある。「何だこりゃ」と思ってから数年後、大学の卒業論文（1992年度提出）で取り組み気づいたのだが、「もが」の付く語はすべて存在詞「有り」の前に来るものなのである。(8)は(9)のように示せる。

(9)a. 老いず死なずの薬あり

b. 天地と共にあり

c. いはばしる滝なくあり（→「なかりけり」などの「なかり」）

d. 心がへするものにあり（→なり）

e. 憂きこと繁く思はずあり（→「ざりき」などの「ざり」）

f. しましは咲かず含みてあり（→たり）

g. 君にたぐひて明日さへあり

「有り」の前に来ない語には付かないので、例えば「たづねに行かもが」などと動詞未然形に付くことはない。「もが」が付く語は、それだけを見ても共通点が見つからないが、「有り」を媒介させると統一できるのである。このことは、「もが」自体に「有り」の意味が含まれていることを示し、「もが」は〈存在の希求^{注4)}〉を表すと考えられる。細かく見れば、次の2種類があり、(8)の用例も分けられる。

- (10) a. 事物の存在の希求：～があることを望む (8 a) (8 b) (8 g)
 b. 事態の存在の希求：～が～であることを望む (8 c) (8 d) (8 e) (8 f)

例えば、前掲(8 a)は「老いず死なずの薬」があることを望み、「不老不死の薬があればあ」と現代語訳できる。(8 f)は「梅の花しましは咲かず含みて」あることを望み、「梅の花はしばらく咲かずに蕾のままであってほしい」と訳せる。こうして見ると、先に参照した(7 a)の古語辞典の解説は、的確な内容を含んでいると言える。

ちなみに、(8)からもうかがわれるが、「もが」は、現実にはありそうもないことを希求する例が多い。そのため、近世以来、実現不可能なことを望むと説かれることがあった。一例を挙げれば、『雨月物語』で有名な上田秋成(1734-1809)は次のように述べている。

- (11) ねがふ辞の[かな]は。大かた[も]と云一言を上におきて。[かな]の[か]を必濁り。[もがな]といへり。[がもな]ともいふあり^{注5)}。またく同意也。此詞のころは。得られまじきを得まく願ひ。あるまじ事をもありたく願ふにて。切なるあまりに。心をさなく打ながめ出る也。

〈上田秋成『也哉抄』、上田秋成全集・6 - p. 57〉

しかし、実現不可能と判断した上で望む専用の形式を持つというのは、考えにくい。手に入らない不老不死の薬には「もが」を使い、手に入る生薬には別の形式を使うという使い分けに、何か意味があるだろうか。現実にはありそうであろうがなかりうが、現に目の前にないことになりはなく、その点で違いはない。「もが」は存在の希求を全般的に表すのだが、使用の場面では、実現不可能な何かを希求することが多いということだと思われる。「実現不可能なこと」を「もが」の意味記述に含めなくてよい^{注6)}。

さて、このように「もが」は存在の希求を表し、そのことが「もが」の付く語と関係するのだが、肝心の「有り」は言葉で表されない。こんな不思議な文法形式がかつてあったのである。現代語でも「言わずもがな」の中に化石的に残っているが、ここにはもう元の意味はない。現代語の感覚では想像しがたい、かくも不思議な文法——しかもそれは遠く隔たった外国語ではなく、現代語と地続きで繋がった日本語なのだ！——に出遭うところに、文法史と文法史研究の面白さの一つがある^{注7)}。

注4 「願望」「希望」と言うこともある。「古典文法」の教科書間で用語が統一されていないが(小田(2014))、これは文法史研究でも同じである。本稿では、何かの実現を望むことを広く「希求」と呼ぶ。「もが」は自分のことの希求((8 e))にも、他人や事物のことの希求((8 c))にも用いられる。

注5 秋成は「もがな(もが+な)」を誤って「も+がな」と分析し、「がな」は詠嘆の「かな」に由来すると見ている。「がもな」は「もがもな(もが+も+な)」のことだと思われる。

注6 現代語の「あれば(なあ)」も事情は同じだろう。「時間があればなあ」「金があればなあ」は、時間も金も絶望的に手に入らない場合が多いが、店で刺身とたまり醤油を前にした「生醤油があればなあ」は、もしかしたら出してくれるかもしれない。

第3節 副助詞の「ばかり」と「のみ」の問題

次に、副助詞「ばかり」と「のみ」を取り上げたい。「古典文法」は、中古語の文法を標準として編まれている。中古の代表的な資料である『源氏物語』から「ばかり」と「のみ」の用例を挙げる。

(12) a. 月影ばかりぞ、八重葎にもさはらずさし入りたる。

〈源氏物語・桐壺、1 - p. 27〉

b. 姫宮のみぞ、同じさまに若くおほどきておはします。

〈源氏物語・若菜下、4 - p. 178〉

「古典文法」では「ばかり」と「のみ」はともに〈限定〉を表すとされ、確かに(12)の「ばかり」と「のみ」はどちらも「だけ」と現代語訳できそうに思われる。しかし、全く同じ意味の助詞は2つも要らないので、何か違いがあるはずである^{注8}。(12)の2例は両方も名詞に直接付き、同じように見えるが、少し調べると違いが見えてくる。

まず、格成分（名詞＋格助詞）に現れる時、「ばかり」は(13a)のように「名詞＋ばかり＋格助詞」の順に、「のみ」は(13b)のように「名詞＋格助詞＋のみ」の順になる。

(13) a. 直衣ばかりを取りて、屏風の後ろに入りたまひぬ。

〈源氏物語・紅葉賀、1 - p. 341〉

b. さもさまざまに心のみ尽くすべかりける人の御契りかな、

〈源氏物語・須磨、2 - p. 163〉

次に、「のみ」は(14)のように副詞、形容詞連用形、助動詞「ず」連用形、接続助詞「て」などに付くが、「ばかり」は付かない。

(14) a. いとど暑きほどは息も絶えつよいよのみ弱りたまへば、

〈源氏物語・若菜下、4 - p. 242：副詞〉

b. 世づかぬ御ありさまは、年月にそへても、もの深くのみ引き入りたまひて、

〈源氏物語・朝顔、2 - p. 474：形容詞連用形〉

c. なほ我につれなき人の御心を尽きせずのみ思し嘆く。

〈源氏物語・葵、2 - p. 17：助動詞「ず」連用形〉

d. なほなやましく、例ならず病づきてのみ過したまふ。

〈源氏物語・若菜下、4 - p. 266：接続助詞「て」〉

整理すると、次表のようになる。(13a)の「ばかり」は名詞に付いているので(12a)と同じく[1]に分類される。(13b)の「のみ」は[2]に分類される。

注7 「もが」については未解決の問題がまだある。特に難しいのは「希望喚体」の問題である。山田孝雄(1873-1958)は、句(clause)を「述体」と「喚体」に分け、喚体をさらに「感動喚体」と「希望喚体」に分けた(山田(1908)が早い、山田(1936)の方が読みやすい)。述体とは、「主―述(花は美し。)」という、述語(動詞・形容詞・コピュラ)が統括する構造である。喚体とは、呼格の名詞が統括する構造で、感動喚体は「述―主(美しき花!)」が典型とされる。一方、希望喚体は「名詞＋もが(花もが!)」が典型とされるが、これは意味的に「花あり」だから、感動喚体とは構造が異なる。これをどう考えるべきか。この問題に関する最高最難の考察に川端(1965)がある。

注8 「ばかり」は〈限定〉の他に〈程度〉〈概数量〉も表すが(小柳(1997a))、ここでは〈限定〉に絞って、「のみ」と比較しながら話を進める。

表2 「ばかり」と「のみ」の接続

		ばかり	のみ
[1]	名詞	(12 a) (13 a)	(12 b)
[2]	格助詞		(13 b)
[3]	副詞		(14 a)
[4]	形容詞連用形		(14 b)
[5]	助動詞「ず」連用形		(14 c)
[6]	接続助詞「て」		(14 d)

[3][4]はそのまま連用成分である。(14a)の「いよいよ」は「弱りたまへば」を連用修飾し、(14b)の「もの深く」は「引き入りたまひて」を連用修飾する。同様の見方をすると、(14c)の「尽きせず」は「思し嘆く」を、(14d)の「病づきて」は「過したまふ」を連用修飾するので、[5][6]も「のみ」は「ず」「て」という助動詞・助詞に付くのではなく、「～ず」「～て」という連用成分に付くと考えられる。

同様に、[2]の「のみ」も格助詞ではなく「名詞+格助詞」という格成分に付くと見るべきである。(13b)の「のみ」は「を」ではなく「心を」に付いている。とすれば、(12b)の「姫宮」も単なる名詞ではなく、格成分と見るのが整合的である。実際にはこのような言い方はないが、(13b)の「心を+のみ」に並べてわかりやすく示すと、「姫宮ガ+のみ」である。そして、格成分も述語に係る連用成分の一種であるから、すべて「のみ」は連用成分に付くとまとめることができる。

これに対して、「ばかり」は名詞に直接付き、(13a)は「直衣+ばかり」で、これに「を」の付いた「直衣ばかり+を」が格成分になっている。同様に(12a)は「月影+ばかり」で、これもこのような言い方はないが、あえて示せば「月影ばかり+ガ」である。こうして考えてみると、見た目は同じ[1]にも違いのあることがわかる。(12)と(13)、[1]と[2]の「ばかり」と「のみ」の違いを図示すれば、次のようになる。(15b)の「名詞+格助詞」の格成分が、連用成分として[3]～[6]と一括されるのは、前述の通り。

(15) a. [名詞+ばかり] +格助詞

b. [名詞+格助詞] +のみ → [連用成分] +のみ

この違いは、実は「ばかり」と「のみ」に限ったことではない。中古の副助詞一般が2種類に大きく分かれ、(15a)のタイプを「第1種副助詞」、(15b)のタイプを「第2種副助詞」と呼ぶ(小柳(1997b)、小柳(2008))^{注9}。

(16) a. 第1種副助詞：名詞に付き、その名詞の表す事物を対象とする。「ばかり」「まで」がこれに当たる。

b. 第2種副助詞：連用成分に付き、それを含む述語句の表す事態を対象とする。「のみ」「さへ」「だに」「すら」がこれに当たる。

「ばかり」と「のみ」は〈限定〉の対象が異なり、第1種の「ばかり」は事物を限定する

注9 「など」は、第1種と第2種の両方がある。「古典文法」では「ながら」「し」も副助詞とするが、これらは副助詞ではない。よくわからない助詞を副助詞に入れるのは、「古典文法」の便宜である。

時に、第2種の「のみ」は事態を限定する時に使うという違いがある。この違いを、次の現代語の「だけ」の例を使って説明してみよう。

(17) a. 代金だけもらってチップはもらわない。

b. 代金だけもらって商品を届けない。

(17a)は「代金」はもらうが「チップ」はもらわないという意味で、「だけ」が限定するのは「代金」という事物である。一方、(17b)は「代金をもらう」ことはあるが「商品を届ける」ことはないという意味で、「だけ」が限定するのは「代金をもらう」という事態である。「代金」か「代金をもらう」か、〈限定〉の対象が違うというのは、こういうことを言い、現代語の「だけ」は両方を表し、どちらであるかは文脈による。

中古語は、この違いを助詞の使い分けによって表していた。事物の限定は「ばかり」、事態の限定は「のみ」である。前掲(13)に即して見ると、(13a)の「直衣ばかりを取りて」は、手に取るのが「直衣(=日常服)」だけで、その他の衣服は手に取らないことを表し、(13b)の「さまざまに心をのみ尽くすべかりける人の御契りかな」は、「さまざまに心を尽くす(=心労を重ねる)」ことばかりで、その他のこと(例えば、特別なことは何もない、心穏やかに付き合う、など)がない縁だったことを表している^{注10}。(13b)は尽くすのが「心」だけで、その他のものは尽くさないという意味ではない。

「ばかり」と「のみ」のこの違いは、2つが続く場合の語順にも現れ、(18)のように「ばかり+のみ」の順になる。「ばかり」は直前の「賤しき東国声したる者ども」を対象とし、「のみ」は「賤しき東国声したる者ども(ガ)出で入る」という述語句を対象とするので、この語順は理屈に合って、自然である。

(18) 庭の草もいぶせき心地するに、賤しき東国声したる者どもばかりのみ出で入り、慰
めに見るべき前栽の華もなし。 (源氏物語・東屋、6-p.83)

また、「歌を歌ふ」「眼を寝」など、述語と目的語が1対1対応の関係であるタイプの文を「同族目的語構文」と言うが(小柳(1999a))、同族目的語構文には(19)のように「のみ」は現れるが、「ばかり」は現れない。

(19) ただ、つくづくと音のみ泣きたまひて、 (源氏物語・葵、2-p.32)

「音」は泣き声、「音を泣く」全体で泣き声を上げて泣くことを言い、「のみ」は泣き声を上げて泣くばかりで、それ以外のことができないことを表す。このような場合には「音」だけを限定することはできないので、「ばかり」が現れることはない^{注11}。

ところが、遡って上代の資料を見ると、ここまで述べてきた理屈と合わない、ちょっと困った例がある。

(20) 夜はも 夜のことごと 昼はも 日のことごと 音のみを〔耳呼〕泣きつつあり
てや (万葉集・巻2・155)

この例は(19)と同じく「音を泣く」に「のみ」が現れている。その点はよいのだが、「のみ」の位置が格助詞「を」の前、すなわち第1種の出現位置なのである。同族目的語構

注10 現代語訳の際、「ばかり」は「だけ」、「のみ」は「ばかり」と訳すとうまく行くことが多い。

注11 現代語でも同様のことがある。「歌だけ歌えばいい」と言えば、歌以外は歌わなくてよいという意味ではなく(他に歌うものなどないのだから)、歌を歌うだけで他のこと(例えば、ダンスをする、手品をする、など)はしなくてよいという意味である。

文に現れるので、意味的には第2種と考えられるが、形式的には第1種である。一体どういふことだろうか。これは、私が研究していて直面した問題なのだが、上代の資料である『万葉集』を調査し、次のように結論づけた（小柳（1999b））。

上代では「のみ+格助詞」という第1種の語順がほとんどで、「格助詞+のみ」という第2種の語順は1例（巻20・4355）だけである。対して、中古では前述の通り「格助詞+のみ」の語順である。また、上代には、表2の〔4〕形容詞連用形（巻17・4015）や〔5〕「～ず」（巻20・4312）などの連用成分に付く第2種の例も見られる。以上から、「のみ」はもともと第1種だったが第2種に変化し、上代は過渡期の最末期に当たるだろう。

したがって、(20)は形式的には古い第1種を保ちながら、意味的には新しい第2種に変わっている例と解釈される。上代では「ばかり」は第1種として未発達である。「のみ」は第1種で出発し、やがて第2種に変化し、これと平行して「ばかり」も発達し、「ばかり=第1種、のみ=第2種」という中古の状態になったと考えられる。

見た目には全く変わりのない「のみ」に、このような通時の変化があったことは、よくよく調べてみなければわからず、「古典文法」の埒内では見えない。過去にあった言葉の変化を発掘し、追体験できるところにも、文法史と文法史研究の面白さの一つがある^{注12}。

第4節 文法変化の問題

文法史研究の大きなテーマに、文法形式はどのように変化するか、という「文法変化」の問題がある。個々の語史を辿る記述的な研究の他に、変化全般を典型的に捉える理論的な研究があり、「古典文法」を大きく超えるが、文法史研究ではこういうことも行うというのを示したいので、最後にこの問題を取り上げることにする。

文法変化の研究と聞いて、研究者がまず思い浮かべるのは、「文法化」という輸入の用語だろう。15年ほど前に、日本語学会の機関誌『日本語の研究』1巻3号（2005）で「日本語における文法化・機能語化」が特集され、その編集後記に次のようにある。

(21) 「文法化」(grammaticalization) という術語は近年になって認知言語学の興隆とともに注目を浴びてきました。日本語史研究の分野でも古くから、自立語（内容語）から付属語（機能語）への変化という問題は注目されてきていましたが、新たな研究方法の枠組みを得て、さらに広く深く研究されようとしています。

〈『日本語の研究』1-3:236〉

「文法化」とは、名詞・動詞などの内容語が、助詞・助動詞などの機能語になる変化を指し、次のような事例がこれに当たる。(22a)は名詞が助詞や助動詞に、(22b)(22c)は動詞が補助動詞または複合動詞後項^{注13}になった例である。

注12 蛇足ながら、第1種から第2種へ変化したと覚しい「ばかり」の例が近世にある。次例の「ばかり」は形容詞連用形に付くので（表2の〔4〕）、第2種の形式である。

・さうわるく計り言たもんでもねへ 〈春色連理の梅・初編下・12オ/1850年序〉
ただし、現代語でこのような言い方はほとんどしないと思う。国立国語研究所の『日本語歴史コーパス(CHJ)』（中納言2.5.2、データバージョン2020.03）で、キー＝「副助詞」、前方共起条件＝「形容詞・連用形一般」、検索対象＝「江戸、明治・大正」を検索した結果も、この1例だけである。

注13 動詞の後に付く付属的な動詞を「補助動詞」と呼ぶか「複合動詞後項」と呼ぶかは、用語の問題であると同時に、文法史の問題でもある。この問題を考える際には、青木（2020）が参考になる。

- (22) a. 丈^{たけ}→代金だけ（限定） 筈^{はず}+コピュラ→来るはずだ（予定）
 b. 果^はつ→失ひはつ（終結） 渡る→待ちわたる（継続）
 c. 賜^{たま}ふ→思ひたまふ（尊敬） 奉る→送りたてまつる（謙譲Ⅰ）

ここに挙げた事例は、文法史研究では以前からよく知られたもので、(22c)などは「古典文法」の敬語の説明でも取り上げられる。だから、これらに「文法化」というラベルを貼るだけでは、大した意味はない。新しい用語と理論は気分を新しくしてくれるが、時流に乗るだけでは物足りないと思う。用語とそれが負う理論を吟味し、そこから新たな思考の可能性を考え出す方が生産的で、はるかに面白い^{注14}。

さて、「文法化」は(21)にあったように、内容語が機能語になる変化を指すのだが、時に次のような事例も「文法化」に入れられることがある。

- (23) a. 雪消え残りたり（結果継続）→ 子得たり（完了）
 b. 鳥鳴くなり（聞音^{注15}）→ 夜明けぬなり（推定）
 c. 国へ赴いた（過去）→ 早う上がつた（命令）

しかし、これはすでに機能語であるものが、新たな機能的（文法的）意味を表すようになる多義化の一種で、(22)とは別の種類の変化である。2つを区別せずに「文法化」と呼ぶのは、曖昧な用語法であり、思考を曇らせると思う。例えば、(23a)の「たり」は「～+有り（＝～という状態で存在する）」という内容語（を含む一続きの表現）が〈結果継続〉の助動詞に変化したもので、それがさらに〈完了〉を表すようになった。よって、ここには次の2つの変化が認められる。

- (24) a. て+有り（～という状態で存在する）→ たり（結果継続）
 b. たり（結果継続）→ たり（完了）

この2つを区別なく「文法化」と呼び、(24a)よりも(24b)の方がより「文法化」している、「文法化」が進んでいると言われることがあるが、これは、カカオ豆からチョコレートを作り、チョコレートからさらにチョコレートケーキを作るのを見て、後者の方がより「チョコレート化」していると言うのと同じくらい奇妙だと思う。私は2つを区別し、端的に「機能語化」と「多機能化」と呼び分けている。(24a)は内容語が機能語になる機能語化、(24b)は機能語が機能的意味を拡張する多機能化である。

別の言い方をすれば、機能語化とは、内容語を資材として新たに機能語を作ることであり、多機能化とは、すでにある機能語を資材として新しい意味を表す機能語に仕立てることである。新たに機能語を作ること「機能語生産」と言うことにすると、機能語化も多機能化も機能語生産の一種であり、また文法変化の類型の一種である。

機能語生産には、あと2種類がある。1つは、複数の機能語を結合して1つの機能語を作る「複合機能語化」で、次のような事例がこれに当たる。資材となった機能語の単純な総和と合致しない、新しい意味を表す機能語になっている。

注14 以下の内容は、小柳（2018）による。この拙著では、文法変化の様々な問題を取り上げているので、ご興味があればそちらを。小柳（2019）、小柳（2020）はそれに続く考察。

注15 終止形接続の「なり」の意味は、「古典文法」では〈伝聞〉と〈推定〉の2つだが、〈聞音〉も認めるべきである（岡崎（1989））。〈聞音〉とは、事態を聴覚的に把握したことを表す意味で、(23b)の「鳥鳴くなり」は、鳥が鳴くことを耳で聞いて捉えたことを表す。現代語には相当する文法形式がない。

- (25) a. ば (仮定) + や (疑問 or 詠嘆) → たづねに行かばや (願望)
- b. と (引用) + も (並列) → 遠くとも近く思へ (逆接仮定)
- c. の (名詞節化) + に (斜格標示) → 見足らぬのに月の隠れる (逆接)

もう1つは、単語を構成する派生接尾辞 (動詞や形容詞の語尾になる) を資材として、機能語を作るというものである。機能語でないものが機能語になるので「機能語化」だが、内容語の機能語化と区別するために、「昇格機能語化」と呼ぶ。「昇格」とは、接尾辞が機能語に格上げされることを指す。昇格機能語化は、古代語では (26 a) (26 b) のような事例が指摘できるが、近代語では (26 c) と類例「げな」「っぼい」がある程度である (小柳 (2020))。文法史を遡って研究しなければ、気づかない類型だと言える。

- (26) a. 霞む (動詞構成の接尾辞) → 花咲かむ (未実現)
- b. 別る (動詞構成の接尾辞) → 人に欺かる (受身)
- c. 童らしい (形容詞構成の接尾辞) → 雨が降たらしい (推定)

以上の4種類の機能語生産を、資材の種類によって整理すると、次表ようになる。これを見ると、「文法化 (= 機能語化)」は機能語生産の1種にすぎないことがよくわかる。機能語化は確かに有力な類型で、事例が多いために目立つが、だからと言って、これだけを取り上げて文法変化全般の性質を考えるのは適切でない。

表3 機能語生産の種類

機能語の資材	機能語生産の種類	
内容語	機能語化	
機能語	多機能化	複合機能語化
接尾辞	昇格機能語化	

文法史研究では、このような文法変化の類型を考えることも行う。これは「古典文法」にも古語辞典にも載らないが、過去の言葉はどう姿を変えて現在に至ったのか、未来に向けてはどんな可能性があるのか、人間はどうやって新しい言葉を作るのか、こうしたことを知る手がかりになる。日本語の文法史は、それを考える上での材料を多く提供してくれる。このようなところにも、文法史と文法史研究の面白さの一つがある

おわりに

「古典文法」の背後には古代語文法があり、古代語文法を含む文法史には、未解決の問題が数多く残っている。おそらく、いまだ問題であることに気づかれていない、未知の問題も隠れているにちがいない。文法は動かしがたく決まっているもの、丸暗記するものと思っいる人は多いと思うが、本稿で見てきたように、歴史の中で変化し、あったものが失われたり、なかったものが現れたりする。文法史研究には、そうしたものを見つけ出し、埋もれていた現象を掘り起こす、遺跡発掘のような面白さがある。また、現代と違う文法がどのような体系をなして、なぜ変化したのか、そうしたことを分析し、見えない仕組みを解き明かす、事件捜査のような面白さもある。

言語は常に歴史的に変化しているから、共時的観点だけでは見落とすことが多々あり、そういう時、通時的観点から見直すと、急に視界が抜けることがある。文法史研究の面白さは

こういうところにもある。大事なことは、所与のものとしてただ慣れるのではなく、なぜこうなっているのか、なぜこうなったのか、なぜこうではないのか、と問うことである。不思議だと思ふこと、問いに気づくこと、これが「古典文法」の埒から出て、その背後にある面白さに出遭うための扉を開くことである。

資料（表記などは私に改めたところがある）

万葉集、古今和歌集、大和物語、平中物語、源氏物語：小学館新編日本古典文学全集

参考文献

- 青木博史（2020）「動詞連用形+動詞」から「動詞連用形+テ+動詞」へー「補助動詞」の歴史・再考ー青木博史・小柳智一・吉田永弘編『日本語文法史研究』5
- 岡崎正継（1989）「推定伝聞の助動詞「なり」についてーその承接と意味ー」『中古中世語論攷』（2016、和泉書院）による
- 小田勝（2014）「高校生向け古典文法書における文法用語・文法説明のゆれについて」『岐阜聖徳学園大学国語国文学』33
- 川端善明（1965）「喚体と述体の交渉ー希望表現における述語の層についてー」『国語学』63
- 小柳智一（1997 a）「中古のバカリについてー限定・程度・概数量ー」『国語と国文学』74-7
- 小柳智一（1997 b）「中古の「バカリ」と「ノミ」」『国学院雑誌』98-12
- 小柳智一（1999 a）「「眠を寝」などー同族目的語構文についてー」『日本語学』18-1、明治書院
- 小柳智一（1999 b）「万葉集のノミー史的変容ー」『実践国文学』55
- 小柳智一（2008）「副助詞研究の可能性」『日本語文法』8-2
- 小柳智一（2018）『文法変化の研究』くろしお出版
- 小柳智一（2019）「孤例の問題ー規範と文法変化ー」東北大学大学院文学研究科『国語学研究』58
- 小柳智一（2020）「機能語の資材ー昇格機能語化と複合機能語化ー」青木博史・小柳智一・吉田永弘編『日本語文法史研究』5
- 野村剛史（2019）「ノダ文の通時態と共時態」森雄一・西村義樹・長谷川明日香編（2019）『認知言語学を拓く』くろしお出版
- 山田孝雄（1908）『日本文法論』宝文館
- 山田孝雄（1936）『日本文法学概論』宝文館

[付記] 本稿は、2020年度信州大学日本語学夏季セミナー（2020年9月7日於Zoom）において「文法研究という法悦ーまたは私は如何にして心配するのを止めて文法史を愛するようになったかー」という題目で行った講演の内容に、大幅に手を加えたものです。席上、積極的に質問して下さった学生のみなさん、また、講演と講演を形に残す機会とを下さった山田健三先生と信州大学人文学部教授会に感謝申し上げます。なお、本研究はJSPS科研費JP17K02787の助成を受けたものです。

* 著者は聖心女子大学現代教養学部日本語日本文学科教授

（2021年4月30日受理、5月14日掲載承認）